

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】(中学校用)

都道府県名	富山県
-------	-----

学校の概要(平成15年4月現在)

学校名	高岡市立高岡西部中学校					
学年	1年	2年	3年	特殊学級	計	教員数
学級数	4	4	5	1	14	28
生徒数	126	155	169	5	455	

研究内容と方法

1 研究主題

確かな学力を身に付け主体的に学ぶ生徒の育成

2 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

<ul style="list-style-type: none"> ・1年・数学：数学単元の基礎・基本となる内容が多いため。 ・2年・数学：生徒の理解の程度に差が出やすい教科、学年であるため。 ・3年・数学：苦手意識が学習意欲低下につながる生徒が出やすい学年であるため。 ・1年・英語：英語学習の習慣化を図るのに適した学年であるため。 ・全学年・英語：書くことだけでなく、声に出して習得させることが言語学習の基礎・基本の徹底につながるため。 ・3年・選択：必修教科と関連させながら個の力を高めることができる時間のため。
--

(2) 年次ごとの計画

平成15年度	<p>テーマ 自ら学ぶ意欲を高め、基礎・基本が確実に身に付く指導方法の工夫 研究の見通し(仮説) 本校では、「確かな学力」を【基礎・基本的知識や技能】はもちろん、これに加えて【思考力、判断力、表現力や学ぶ意欲】などをバランスよく身に付けさせ、学力の質を高めしていくことととらえ、共通理解した。平成15年度は、生徒の学力を把握し個に応じた指導方法の工夫や指導体制の確立を推進することにより、「確かな学力」の土台となる【基礎・基本的知識や技能】を身に付け、学ぶ喜びを体得する生徒を育成することができると考えた。</p> <p>研究の内容・方法 四つの部会を編成し、教科部会を中心に各部会が連携しながら個に応じた指導を実践研究する。</p> <p>〔教科部会〕 個に応じた学習活動を展開し、「できた」「分かった」「おもしろい」授業をめざして教師一人一人が指導力アップを図る。 県中教研学力調査結果、定期評価テスト結果を各学年各教科が観点別に分析し、本校生徒がどのような点で指導を要するか明らかにする。 指導を要する点を小学校にも伝え、連携を図るとともに日々の授業でどのような手だてを講ずればよいか教科で検討しながら授業法を工夫・改善する。 (例) 1年数学科：基本的な計算問題を毎時間の授業で繰り返し練習する。短い範囲での確認テストを実施する。 2年数学科：2クラスを3コース4クラスに分け、クラスに一人ずつの教師が授業を行う少人数習熟度別指導を行い、より一層個に応じた指導体制を確立する。また、常に教師が連携を図り指導方法や教材開発について研鑽を積む。 3年数学科：数学的見方、考え方のおもしろさを知らせる問題解決的な授業の指導過程を工夫する。 1年英語科：学年体制で「毎日の宿題プリント」を実施し、英文のきまりを定着させるとともに英語学習の家庭での習慣化を図る。 全学年英語科：毎時間授業の始めのペアによるスモールトークキングなどペア活動の継続。一人一人の表現活動を豊かにする。</p> <p>全校体制で「互見授業」を実施し、相互に授業を参観することによって、これまでの指導方法について見直しを図り、研究主題解明に向けて今後の指導・支援方法の工夫改善に生かす。</p> <p>〔選択教科部会〕 生徒の能力・適正、興味・関心に応じて多様な学習活動ができるよう、選択教科の学習内容や指導方法を充実させ、個の力を高める時間にする。 3年生は週4時間履修するため全校体制で取り組み充実を図る。 (例) 5教科：8コース開設し、各自2教科選択する。国語、数学、英語については「補充的な学習」と「発展的な学習」ができるようにコースを準備する。</p>
--------	--

4 教科：5 コースより1 教科選択し、週2 時間かけてじっくり取り組めるようにする。必修教科との関連を意識し、学んだ技能をさらに高めたり、表現力を豊かにしたりすることをめざす。

選択教科をなるべく少人数編成にするため、同時に12～13 コース開設できるよう時間割を工夫する。3 年選択では5 教科は1 コースに10 人前後、4 教科では20 人前後として、個に応じた指導を行う。

〔学習ガイダンス部会〕
教科部会で取り組んでいる日々の授業改善を一層進めるために、その脇を支える取り組みとして放課後の学習ガイダンス体制を立ち上げる。生徒一人一人に応じた支援体制をつくることで生徒が主体的に学ぼうとする意欲や態度を育てる。

「スタディークラブ」と名づけ、原則として金曜日の放課後と定期評価前の部活動停止期間中の放課後1 時間程度各学年2 つの教室を開放し、生徒が自主的に学習できる体制をつくる。教室はA、B 2 コースに分け、それぞれに教員を複数配置し、質問や学習相談に応じる。

実施数日前に「スタディークラブ」開設日等のお知らせプリントを生徒に配布したり、教師による呼びかけを行ったりし、参加の強制はしない。

〔小学校、家庭との連携部会〕
生徒の学習効果がよりあがるような支援体制をつくるため、小学校や家庭との連携を強化する。

各教科から小学校で指導してほしいことをお願いし、系統的に学習が進むようにする。

小中合同研修会や相互授業参観を年数回実施し、小中の教師が互いの指導法や学習内容の程度等を知り、自分の授業に役立てる。

小学校へ中学校の教師が出向いて授業を行う出前授業や小学6 年生が中学校の授業を参観する機会をとおして、新入生に中学校の学習に興味・関心をもたせ、学習意欲を喚起する。

P T A 広報委員会と連携し、広報紙に学力向上フロンティア特集を組む。年間通して学校の取り組みを紹介するとともに、家庭からの協力をお願いする。

平成16 年度

テーマ 基礎・基本を踏まえながら学び、考え、表現できる生徒の育成

研究の見通し
平成15 年度の四部会の取り組みを継続し、基礎・基本の定着を図ることを基本とする。また、「確かな学力」の中の思考・判断・表現力の育成にも努める。そのため教科部会では、新しく「学びの軌跡」の中の思考・判断・表現力の育成にも努める。そのため教科部会では、新しく「学びの軌跡」を記す「ノート指導と表現活動」に取り組む。課題解決型の授業をしくみ、解決に必要とされる知識や技能、思考の過程を学習の足跡としてノートに記録する効果的なノートの使い方を検討、指導し、習慣化を図る。このことによって自ら学び、考える力が育つと考える。さらに考えをグループや全体の場で表現する体験を積み重ねることによって表現力が身に付くと考える。

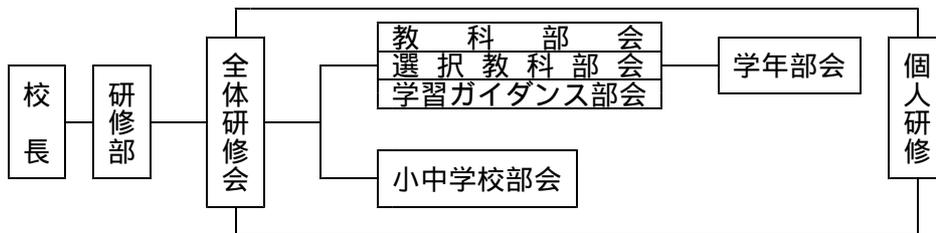
研究の方法・内容（新しい取り組み）

〔教科部会〕
数学・英語に限らず、各教科が個に応じた指導法や指導体制のさらなる工夫と改善を進める。

5 教科において「学びの軌跡」となるノート指導を行い、思考・判断・表現力育成に努める。

〔小学校、家庭との連携部会〕
校内だけでなく小中学校で互見授業を行い、系統的な学習や授業改善に生かす。

(3) 研究推進体制



平成15年度の研究成果及び今後の課題
1 研究成果

(県中教研 11 月学力調査の観点別正答率の比較) (4 月、11 月調査の県平均点との比較)
* 県平均点を 100 とする

1 年 数 学

観点	本校	県平均
数学的な見方・考え方	64.3 %	67.2 %
数学的な表現・処理	80.9	73.0
数量、図形などについての知識・理解 (小学校内容)	66.3	67.3

2 年 数 学

観点	本校	県平均
数学的な見方・考え方	56.2 %	54.4 %
数学的な表現・処理	62.1	58.0
数量、図形などについての知識・理解	48.4	51.3

3 年 数 学

観点	本校	県平均
数学的な見方・考え方	37.7 %	30.8 %
数学的な表現・処理	64.5	56.0
数量、図形などについての知識・理解	50.0	40.9

1 年 英 語

観点	本校	県平均
関心・意欲・態度	59.4 %	50.0 %
表現の能力	61.4	56.1
理解の能力	77.2	76.4
言語や文化についての知識・理解	80.4	79.4

やりぬいている自信からか〔表現の能力〕における正答率が高く、特に、基本文型に近い英作文では下位の生徒もよくできていた。本年度の取り組みをとおして、本校生徒はおおむね基礎・基本的内容を確実に身に付けてきたといえる。また、学習課題にも意欲的に取り組む姿勢がみられた。

数 学

		4 月調査	11 月調査
1 年	本校	107	107
	県	100	100
2 年	本校	101	108
	県	100	100
3 年	本校	113	116
	県	100	100

英 語

		4 月調査	11 月調査
1 年	本校	111	111
	県	100	100
2 年	本校	97	105
	県	100	100
3 年	本校	110	111
	県	100	100

< 考察 >
・ 県と本校の平均点の比較から分かるように 4 月調査に比べ、11 月調査の方が大きく県平均を上回った。観点別に見ると、全学年数学では〔表現・処理〕の正答率が高く基礎・基本的内容が定着していることが分かる。

1 年英語では、「毎日の学習プリント」を

2 今後の課題

基礎・基本を踏まえながら、それをもとに課題について考える、話す、書く、まとめるというような思考力、判断力、表現力の伸長が求められる。総合的な学力の質を高める「確かな学力」が身に付くよう、来年度はさらに指導方法、体制の工夫が必要である。

学力把握のための学校としての取り組み

県学力調査、定期評価実施ごとに結果を観点別に分析し、落ち込みを把握するとともにそれに対する指導法の手だてを校内研修会に提示する。日常の授業で実践する。
5 月中間評価と 7 月期末評価の分析比較 1 学期の反省
10 月中間評価と 12 月期末評価の分析比較 2 学期の反省と 1 学期との変容把握
11 月県中教研学力調査と 4 月県中教研学力調査の分析比較 1 年間のまとめとして利用、学年末・来年度への指針

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

- (1) 平成 15 年度は研究成果を P T A 広報紙に載せ、校区全世帯、市内中学校に配布 (年 3 回)
- (2) 平成 16 年 11 月中旬 本校にて県下中学校、市内小学校を対象に研究発表会開催予定

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

- 【新規校・継続校】 15 年度からの新規校 14 年度からの継続校
- 【学校規模】 3 学級以下 4 ~ 6 学級
 7 ~ 9 学級 10 ~ 12 学級
 13 ~ 15 学級 16 学級以上
- 【指導体制】 少人数指導 T・T による指導
 その他
- 【研究教科】 国語 社会 数学 理科
 外国語 音楽 美術 技術・家庭
 保健体育 その他 (3 年選択 9 教科)
- 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無